

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	秋日湖上の記：文苑
Author(s)	残夢庵主人
Citation	龍南會雜誌， 6 2： 4 8 - 4 9
Issue date	1897-12-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4997
Right	

爲には、一通りは考へ置くも、不可なる事はなかるべし、城は家屋の本ともいひて、國君たる人、其國を治めんが爲には、大小を論せず、皆其守を設けて、安平を計り、惡逆を従へしなり、而して、兵家は城を守るの法と、城を攻むるの法とを設けて、守る第一には、城制をわけて、專堅固安佚を計れり、我は佚して、彼の勞をまぢ、我は靜まりて、彼は動く、規縱準繩に當りて、始めて敵を敗るべき、かくて、或は陰を用ひ、陽を用ひ、場合によりて、陰中陰、陽中陽を用ふ、各其法あり、而して、陰陽の品分つ所は、主として、虎口にあり、其事既にいへり、而して虎口と馬出しとは、相待ちて離るへからざる事亦明けぞ、されば、馬出しの事、穴勝に打すつへきにあらすとして、思ひ當りし節々を、不束ながら右にかく事とはなしぬ、

猶馬出しの堀の間數、さては、之に築く堀の高、及堀と堀との間の間數など、一々其式あれど、さまではとて略しぬ、委しくは、其道の書を見たまへかぞ。

文苑

秋日湖上の記

殘夢庵主人

秋の空の景色も、やうくにあはれにて、山の端も近う見え渡るに、鳥の三つ四つ、雲井遙に飛ひ行くもをかし、前栽の花などもれのかし、亂れ咲きたるに、文讀む心地もせねば、人伴へて半里ばかりへだよりぬる、吉が浦の池といふ所になんゆく、樹の紅葉も昨日の時雨に色まして、路の邊に生ふる女郎花の、打靡きたる色もをか

しく、花、な、ま、も、そ、こ、に、く、ま、な、く、生、ひ、茂、れ、る、水、際、を、ゆ、け、ば、雇、も、ど、よ、り、水、鳥、の、た、ち、あ、か、り、た、る、い、と、興、あ、り、け、り、か、く、て、二、つ、の、山、を、越、え、行、け、ば、や、が、て、池、見、ゆ、高、き、峰、峯、其、傍、に、重、り、合、ひ、て、夕、日、の、影、も、い、と、小、暗、さ、に、數、し、ら、す、楓、の、松、の、碧、に、打、交、り、て、青、地、の、錦、を、ひ、ろ、け、た、ら、ん、や、う、な、る、鳥、の、な、く、音、も、き、こ、え、ず、あ、た、り、い、と、淋、え、池、の、面、は、一、つ、ら、の、鏡、な、ま、て、半、枯、れ、た、る、村、葦、の、は、か、な、く、打、伏、し、た、る、よ、ろ、づ、見、所、あ、り、ま、ま、て、水、に、映、れ、る、樹、々、の、梢、波、に、た、よ、ふ、水、鳥、の、影、殊、に、い、さ、き、よ、し、其、東、の、岸、邊、に、は、大、き、な、る、岩、の、苔、む、し、た、る、に、紅、葉、の、ち、り、か、ゝ、り、た、る、自、か、ら、な、る、螺、鈿、と、見、ゆ、る、も、心、に、く、ま、い、か、な、る、人、に、か、あ、ら、ん、供、人、二、人、三、人、打、つ、れ、た、る、綱、な、ど、投、け、居、た、る、ま、ま、た、こ、れ、書、中、の、人、な、り、あ、な、た、を、見、れ、は、行、脚、の、僧、一、人、遙、に、溪、間、を、行、く、ま、ま、立、澤、の、景、色、も、そ、い、る、思、ひ、出、で、ら、れ、て、心、な、き、身、に、も、哀、ぞ、し、ら、れ、け、る、い、つ、し、か、日、も、名、残、な、う、入、り、果、て、夕、日、の、影、は、見、え、夕、か、ら、す、の、聲、の、そ、ろ、身、に、し、み、渡、れ、は、か、た、へ、に、散、れ、る、槇、の、枯、葉、の、大、な、る、に、は、か、な、き、う、た、か、き、記、る、し、て、池、の、水、に、流、し、た、る、ぞ、け、ふ、の、手、む、げ、な、り、げ、る、

庭田の落葉

溪 川

秋風にたゞ散りまよふ柏木の

にはたの落葉やさなましものを